

## 牛の空回腸と結腸

(全食協病理部会第41回研修会・演題：1638 発表者：安達 有紀)

牛 (ホルスタイン)、雌、2歳6ヵ月

- 経緯 と殺の1ヵ月前より水様性下痢および下顎の浮腫が発現した。  
平成11年3月26日、家畜保健衛生所により、ヨーネ病と診断された。  
(糞便から集塊状の抗酸菌が認められ、ELISA値は1.273であった。)  
平成11年4月8日、ヨーネ病罹患牛として搬入された。
- 生体所見 軽度の消瘦が認められた。
- 肉眼所見 空回腸は肥厚し、粘膜面には、わらじ様の皺壁が形成され、出血も認められた。さらに、空腸リンパ節には中程度の腫大が認められ、これらの病変は小腸下部により強く見られる傾向にあった。また、結腸には、顕著な肥厚は認められなかった。
- 組織所見 空腸中間部、下部および結腸上部では、粘膜固有層に類上皮細胞の浸潤とラングハンス巨細胞の散在が認められた。さらに、空回腸下部および結腸上部では、このような病変が粘膜下織までおよんでいた。特に、空回腸下部においては、類上皮細胞の著しい浸潤による絨毛の顕著な肥厚が認められた。また、結腸上部では、病変部の境界と思われる部位が存在した。  
空腸リンパ節でも同様に、類上皮細胞の浸潤が認められた。  
チール・ニールセン染色により、各病変部に抗酸性の小桿菌が見られた。
- 細菌検査 糞便、空回腸と結腸の粘膜および、空腸リンパ節の塗抹標本において、抗酸性の小桿菌が見られた。また、マイコバクチン加ハロルド培地上で黄白色コロニーの発育が認められた。さらにPCRでもヨーネ菌を検出した。
- 診断 肉芽腫性腸炎 (ヨーネ病)
- まとめ 本検査所では平成11年度で7頭のヨーネ病罹患牛の搬入があった。しかし、そのほとんどが所見に乏しく、細菌検査で抗酸菌が認められないものもあった。本症例では、回腸から結腸まで広範囲に肉芽腫性炎が見られ、細菌検査においても多数の抗酸性小桿菌が認められたため、重度の感染例といえる。